エレガンス　élégance

2016 年南仏アヴィニョンフェスティバル　オフ　参加報告

花柳　衛菊
2016・Aug　Egiku Hanayagi

アヴィニョンフェスティバル オフは毎年 7 月の 3 週間、直径 1.2km の城壁に囲まれたアヴィニョン旧市街で行われ、英エディンバラフェスティバルフリンジと並ぶ世界屈指の演劇祭である。参加カンパニーは世界中から 2000 以上。毎年このフェステイバルに 1 時間の公演で参加して 16 年、海外フェステイバル参加は計 20 年で今回は 21 回目になる。

エレガンス、今回のフランス滞在はこの言葉の意味を深く理解する公演旅行となった。これから、エレガンス、という魅惑的な言葉を聞くたび、パリのすぐ隣の高級住宅地サンマンデ市のマダム ミュリエールのことを思い出すだろう。彼女と行動を共にしたのは 2 日間。現代美術のプロデュース等の実力者という彼女は 60～70 代くらいだろうか、初日は白いシャツに赤を基調とした大きな蝶のネックレスに赤のスカート、赤と白の大きなイヤリング。２日目は青いシルクのシャツに大きな蝶のブローチを３つ縦に並べて付け、細かい柄の黄色いパンツ、時々黄色い無地のシルクスカーフを巻き、パーティでは黄色の総絞りの羽織を重ねた。きらめくような色の服飾のすべてが彼女の一部となっていた。そして背筋を伸ばし、テキパキと仕事をこなす姿が正しくフランスのエレガンスだった。派手な服を着た時、服の方が個性より目立ってしまう私たち日本人とどこが違うのだろう。10 代から 20 代の頃､エレガンスというフランスのファッション誌を飽かず眺めていた。ページをめくる度にドレスとモデルの完璧な調和に、そしてモデルのさりげないポーズにうっとりしていた。そしてあれから数十年、ミュリエールにそのさりげない自然なエレガンスを見た。このエレガンスの土壌にフランスのモードがあり、あの雑誌が生まれたのだ。エレガンスは、長い歴史の中で育まれ、フランスの貴婦人に熟成されてきたのだろう。あらゆる美術品が壁、床、テーブルに所狭しと飾りたてられながら雑然さがなく、美術館より濃厚で、オペラの BGM が静かに流れていた彼女のアパルトマンも何と居心地のいいエレガンスだったことか。

2000以上の全てのフェスティバル参加公演の写真が印刷されたシートの前で。私たちのは頭上の白丸です。左から　坂　麗水さん、衛菊、福原道子さん

今回、エレガンス、という言葉が出てきたのは実は 3 回。ミュリエールのエレガンスは旅の最後の 3 つ目の瀟洒なエレガンスだ。最初のエレガンスは、篠笛と琵琶演奏が入った「平家物語-を語り継ぐ」という私のアヴィニョン 15 回連続公演の 3 回目に見に来てくれた、知的な漆黒のボブヘヤのマダムが公演終了後に残してくれた言葉だった。「Bouté、raffinement、élégance」美・洗練・優美。身に余る光栄を感じ、今回の出演者、薩摩琵琶奏者の坂麗水さん、篠笛奏者の福原道子さんと思わず歓声を挙げた。本当に有難かった。その激励のエレガンスが私たちのその後の 12 回のアヴィニョン公演を精神的に支えてくれたといっても過言ではない。

状況としては大変過酷なフランス滞在であった。7 月 14 日革命記念日の早朝シャルルドゴール空港に着いた。飛行機は迂回ルートをとり、到着が遅れ、新幹線 TGV の発車時刻に

間に合うか沈痛な面持ちで入国検査に並んでいた目の前で、スキンヘッドで全く手に何も持たない男が警官に囲まれて別ドアから出て行った。エッ、テロリスト？思わずひるんだ。その後、無事、TGV に乗ることができ、朝 10 時過ぎにアヴィニョンに着いたのだが、いつものアヴィニョンの熱暑とは異なり、嵐の前のような冷たい風が吹き荒れていて、町は枯れ葉が散乱していた。翌日の公演に備え、その日の午後 5 時にリハーサルを終え、日本から訪ねてきた友人を送り出し、寝入った夜中 2 時頃、麗水さんの携帯がけたたましく鳴った。ニースで大変なことが起きているが無事か、という電話だった。情報は携帯に入るメールだけ、という情報ロスの中で、何のことかさっぱりわからず、翌日劇場に着いて、ニース事件の話を聞き、町が重い空気だった意味を知る。初日の公演は祈りと鎮魂がテーマとなった。後から聞いたのだが、“フェスティバルを中止してはならない、テロリストに屈してはならない、チケットはキャンセルしてはならない、”とネット上で盛り上がっていたらしい。その夜、トルコ経由で帰国の途についていた友人がトルコのクーデターに巻き込まれたのではないか、とのメールが日本から入り、小さな国々が直接国境を接し、次々に歴史的危機が起こるヨーロッパの人々の苦しみがわかるようになっていった。友人は砲弾が空を飛ぶ光景を見ながら 28 時間トルコの空港に足止めされた後、無事に帰国した。そして、その後も世界のテロ事件は止まることがなかった。舞台芸術は死の恐怖の前では何も役には立たない。フェステイバルは悲しみ、恐怖を吹き飛ばすように、どの公演も皆必死で演じ、実に見ごたえがあった。

劇場に行く途中、声を掛けられ記念撮影

15 回目の最終公演後、フランス人の男性と女性が声を掛けてきた。この平和的な日本の音色を外で皆に聞かせて欲しい、と男性のサムウェルが言う。最終公演が終ってしまった後なので、宣伝にはならないが、篠笛と琵琶、舞踊で 15 分パフォーマンスを 2 か所で行うことにする。彼の提案通り、篠笛が響き始めると、人々の足が止まり振り向き、集まってきた。皆、座っていい顔をして聞き入っている。日本の伝統の響きがフランスの人々に手を差し伸べ、慰め、癒し、酔わせている。平和を願う心は一つ、私自身その輪の中にいて感動していた。

平和の祈りを込めた　野外公演

２回目のエレガンス、それは 14 回目の公演終了後、ESPACE ALYA 劇場でハンガリーの DUSAN HEGLI COMPANY、「fine tuning」（素敵な同調）というダンス公演を見た時だ。これこそが「Bouté、raffinement、élégance」美・洗練・優美、だと思った。ち密、濃厚、熟練、鍛錬、美、洗練、優美、あらゆる賛辞を投げかけても惜しくはない。ハンガリーの民俗舞踊から流れ出でて、決してフォークダンスではない、風土色を残したコンテ

ンポラリー。民俗舞踊が持つ細やかな振りを完全にコンテンポラリーにしてスピード感あふれ、しかも大勢のダンサーが一瞬の乱れもなく完璧に合わせる。どれだけの稽古が必要なのだろう。これでもかこれでもかと、民俗舞踊の振りを少しずつ変化させ密度を上げて迫ってくる。力強い土着のエレガンスであった。

ビリヤード台でのサンマンデ市アトリエ公演

そして15回の公演を終え、パリに移動、マダム ミュリエールとムッシュ黒井プロデュースの、今回の最終イベントであるアトリエ公演に臨んだ。パリの隣、サンマンデ市の文化施設の一室を市が提供してくれ、二人がソワレ公演として、友人たちを招待してくれたのだ。私たちをパリの文化人に紹介してくれるために。16年アヴィニョンに通っていることが皆を感動させ、10 人位のつもりがバカンス中にもかかわらず、40 人以上になってしまったとのことだった。兎に角、二人に恥をかかせてはならない、彼らを落胆させてはならない。ムッシュ黒井は一昨年の秋にパリの小さな劇場、エスパスベルタンポワレで踊った「哀し」を見てから、いろいろ声を掛けて下さっている。彼は渡仏 30 年以上、パリオペラ座でも踊ったことがあるダンサーであり、振付家、プロデューサー、教授等、あらゆるものを精力的にこなし、能、狂言もたしなむ。どうしても彼に満足してもらわなくてはならない。ムッシュ黒井はサンマンデ文化施設の部屋を見回し、ビリヤード台と木の蓋を見つけ、ふたをしたビリヤード台で踊れますか、と聞いてきた。日本舞踊は一間四方で踊れます、と返事をしたが、何と 1m×2mに少し大きい程しかなく、高さは 1mもある。でもやるしかない。やります、と返事をした。３歩を１歩にして、走るところを細かく刻む足運びにする、扇子、手ぬぐいを落としてはならない、足を踏み外してはならない。だがビリヤード台公演は成功だった。５列以上の段差のない客席後方からも私の足元まで見て頂くことができたのだ。終了後のパーティでの皆の言葉に、この公演が皆様に満足していただけたことを知り、またムッシュ黒井から、いくつかの公演の提案を受け、今後の私にとっていい風が吹いたことを知った。

フランスのダンス教授かすみさん　衛菊　ムッシュ黒井
かすみさんはリヨンの国立劇場に入った初めての日本人ダンサー

深夜の帰りのタクシーの中で、暗いパリの街を眺めながら、20 年前、無謀にも単身エディンバラ演劇祭に初めて参加した時のことを思い出し、芸術の都パリの扉を自力で開けるためには、自分の実力向上を含め、20 年続けてフェスティバルにアタックする絶え間ない挑戦が必要だったことを思っていた。